

高齡窃盗事犯者のリスクと犯罪原因論

- 「素質リスクと環境リスクの複合的視点」からの一考察 -

東北福祉大学 菅原好秀 (会員番号 4814)

[キーワード] : 素質リスク、環境リスク、複合的要因

1. 研究目的

平成20年版の犯罪白書によると、65歳以上の高齢者による犯罪は、罪名別動向においては、窃盗が65.0%と一般刑法犯検挙人員の3分の2近くを占めている。中でも万引きに占める割合が25.2%となっている。女性の高齢者においては、窃盗が88.4%を占めており、その比率の高さが一段と目立っている。この女性の高齡窃盗事犯者の場合は、生活基盤はあり、生活費自体に困っているわけではない者が多く、少額の食品等の万引きがほとんどで、高齡になって万引きを繰り返すようになった者も少なくなかった。

高齡犯罪者の犯罪原因においては、たいていの事象は他の現象と合わさって起こり、明確に切り離すことは不可能であり、どれが原因でどれが結果か、現実の中では容易に区別しがたく、明確に切り離すことは難しい。それだけ事象は相互に依存しあって、複雑な織物を成しているのである。また、人間が犯罪者になる要因としては、数量化・標準化の規範測定からこぼれ落ちてしまうもののなかに、犯罪原因が隠されている可能性がある。例えば、生活が困窮した結果、食料品の万引きをすることは、数量化・標準化の規範測定から犯罪原因を探求しやすいが、前述のように女性の高齡窃盗事犯者の場合は、生活基盤はあり、生活費自体に困っているわけではない者が多く、少額の食品等の万引きを繰り返す事案のように、数量化・標準化の規範測定になじみにくい事案もある。

本稿では「高齢者自身の内的要因によるリスク(素質リスク)」と「高齢者の取り巻く環境によるリスク(環境リスク)」の視点から、新たな高齢犯罪者の出現を防止するとともに、高齢犯罪者の改善更生させるための方策を研究目的とする。

2. 研究の視点および方法

研究の視点および方法としては、犯罪白書のデータの分析作業を行うことで、健全な高齢社会の実現のために必要不可欠な社会科学的作業を行う。特に高齢犯罪者の中でもっとも多い「窃盗」は、国民経済活動のリスクを増大させることから、窃盗の事案を通じて、高齢犯罪者の犯行の背景を探り、高齢犯罪者の増加の真の原因について考察する。

3. 倫理的配慮

犯罪白書の事例は事案によっては特定の個人を対象とする場合があるため、当該事例を制度という視点と枠組みで検討を加えた。

4. 研究結果

第一に高齢者自身の内的要因によるリスク(素質リスク)としては加齢による、体力の低下、判断力の低下、抵抗力の低下などが挙げられる。高齢者自らの安全管理・自己管理能力が低下し、反応も鈍くなり、予見能力が低下することによって、犯罪の結果回避が不

十分になるおそれがあるからである。

犯罪防止のためには、認識、知覚、知性、言語などの自己理解や状況理解を深める能力が必要である。犯罪をした出来事を、客観的に認識し、将来の日常生活が困難に陥ることを予測し理解するという能力は犯罪抑止の基礎能力として必要である。つぎに、社会生活においては、柔軟性、受容性、率先性、忍耐力などが必要である。つまり、人間がより良い生活を確立していくためには、柔軟に現実や環境に対応することが必要であり、多種多様な人間を受け入れる受容性も必要である。高齢者が意欲と積極性に満ちるためには、現実をプラスに志向し、興味、関心、希望、夢、向上心などの要素が必要となる。このような要素が、人間の活力、精神力、集中力、などを生みだし、病気を乗り越える達成意欲を喚起し人生の意味を求める探究心や自己実現を模索する行動の源となるからである。しかし、加齢にともない身体的・精神的健康が低下すると、人間の意欲、積極性、思考、柔軟性、受容性、率先性、忍耐力が低下し、犯罪のリスクが増大する要因ともなりうる。

第二に高齢者の取り巻く環境によるリスク（環境リスク）としては、高齢者に内在し、備わっている能力や特質のみならず、高齢者が生活を営む環境からも影響を受ける。滋養的な環境であれば、高齢者はその能力や才能を十分に伸ばし発揮することが可能になるが、生活環境が悪化すれば、高齢者の能力を発揮しにくくなる。人間は環境や周囲の期待に応えるべく、積極性が培われるものである。しかし、平成20年度の犯罪白書によると、平成17年度の高齢者人口に占める一人暮らしの高齢者の比率が男性9.7%、女性19.0%の現状を考えると、高齢者の孤独・孤立化が進み、さらに経済的不安が増大している環境の中で、自分の選択した行動や態度が、社会的に認められ、それが評価される環境が乏しい。また、新卒の学生でさえも就職難である現状において、高齢者が社会から報酬を受けることにより、高齢者自身が自信を持ち、与えられた社会の中で自己の存在意義を認識し、以前にもまして積極的かつ能動的に社会に関わりながら、自己成長を遂げていくこと自体、高齢者には困難な状況にある。

さらに、商品の購入における環境上のリスクにおいて、大量生産・大量消費の時代において、スーパーなどの食料品は商品の陳列棚から自己の選択に基づいて、商品を決定し、スーパーのかごの中に商品を入れ、レジで会計をすませるシステムである。対面方式ではないスーパーの商品販売方式は、スーパーのかごにいれずに、隠れて自己の紙袋にいれて、持ち去ることができるという環境上のリスクが発生する。スーパーが特売などで、客が増え、レジが込み合い、店員の監視が届きにくい状況においては、さらにその犯罪リスクが増大する。

以上のように、素質リスクと環境リスクの2つの要因が複合的に重なり合った場合に犯罪が起こる可能性が高いが、2つのリスク要因は一定に固定したものではなく、常に流動的であり、その要因の割合や比重がさまざまであることを認識しておくべきである。